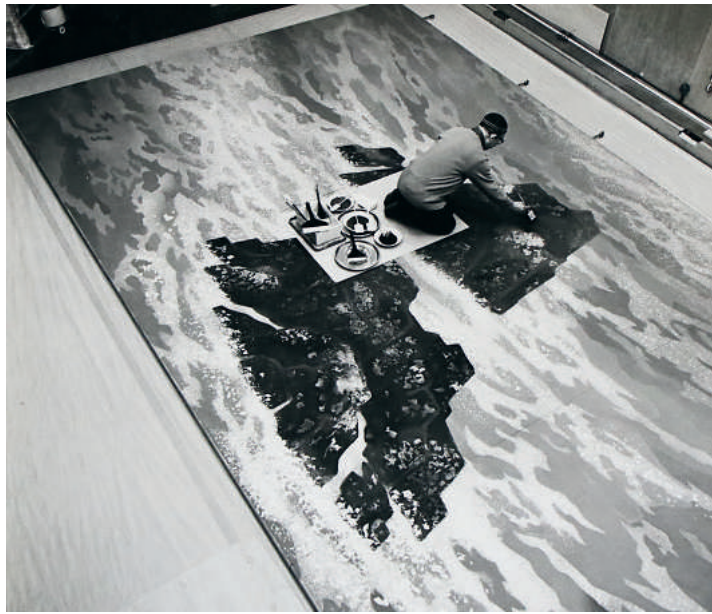




東山魁夷 《朝明けの潮 色分け大下図》 1967年 当館



《朝明けの潮》

1968年に竣工した皇居宮殿のために制作された壁画。縦約4メートル、横約15メートルになる大作で、東山が手掛けた中では最大級の作品。皇居宮殿の長和殿、南溜の階段を昇った正面に設置され、この部屋は山口県の青海島を取材地とした本作にちなみ「波の間」と呼ばれる。完成から半世紀以上にわたり、日本を訪れる海外の賓客を迎えてきた。作品名の《朝明けの潮》は、万葉集にある歌から採られた。宮内庁からの依頼は「日本の風土を象徴するもの」というだけで細かな指定はなかったが、東山は海景を主題とすることに決め、約1年間をかけ日本各地の海辺を見てまわり構想を練った。壁画は長期間掲出されても劣化せぬよう、全体に天然の岩絵具を使用し、岩石の黒にも緑青を焼いて黒くしたものを用いた。また、画面全体にほどこされた箔にも変色しない金やプラチナを使用した。

坂を登ると、たちまち烈しい風が吹きつけてきて、断崖の上に出た。

松の木立越しに、泡立つ海と、黒い岩礁を見おろす。

波は青くうねって打ち寄せ、岩に叩きつけ、真っ白に碎けて響く。

岩は鋭く垂直に立つもの、波に見えかくれする群れ、

いずれも荒波に刻まれて堅固な面魂を見せている。

ここは山口県^{おうみしま}青海島である。

東山魁夷『風景との対話』より

東山魁夷館は、画家本人からの寄贈を受け1990年に開館しました。作品だけでなく、多数のスケッチや下図類を紹介し、今年で開館35周年を迎えます。本展ではこれを記念し、東山作品の中でも最大級の皇居宮殿壁画の原寸下図《朝明けの潮 色分け大下図》を額装後初公開します。皇居宮殿にある完成作は通常一般公開されておらず、作品の大きさや雄大さを体感できるのは、皇居外ではこの大下図のみです。展覧会では、下図や準備作、当時の資料などからその制作過程に迫ります。また、《朝明けの潮》の制作は画家にとって風景への関心が日本の風景美へと回帰する起点ともなったことから、東山魁夷が描いた日本の風景をあわせてご紹介します。



《道》 1950年 東京国立近代美術館



《門》 1952年 千葉県立美術館



《波響く磯》 1983年 参議院



《谿紅葉》 1968年 兵庫県立美術館



東山魁夷 ひがしやま かい い (1908～1999)

日本画家、横浜生まれ。本名、新吉。3歳の時、神戸に引越し同地で育つ。1926年、東京美術学校日本画科に入学。卒業後、同校研究科に入学し結城素明に師事、雅号を「魁夷」とした。研究科修了後、2年間ドイツに留学して西洋美術史を学び、欧州各国の美術を精力的に見てまわった。1947年《残照》が日展で特選受賞、1950年日展に《道》を発表、一躍「国民的画家」と呼ばれる存在となる。1969年文化勲章受章。日本だけでなく北欧やドイツ、オーストリアの自然や風景を数多く描く。また皇居宮殿壁画や唐招提寺御影堂障壁画など障壁画にも傑作を残した。